令和３年度　岡山県立岡山大安寺中等教育学校　学校評価書（別紙）

最終評価

学校経営重点目標	具体的方策	担当部署	評価指標・評価基準	自己評価（中間）達成状況	評価	自己評価（最終）達成状況	評価	関係者評価
1 新型コロナウイルス感染症に対し、安全な教育環境を整備する。	・昼食時の感染を防ぐために、３密を避ける形態を維持継続する。 ・清掃時の生徒机や椅子、ドアノブ等の除菌を励行する。	厚生課	・感染者のゼロを目指すが、ゼロかそれ以上で評価されるものではない。生徒や教員の意識レベルや関心意欲の度合いが重要である。 A　生徒自身に意識の向上が見られ自発的行動が取られるようになる。 B　教員の指導が欠かせない状態である。 C　慣れや惰性によるモラルの低下が顕著で手洗いや食事方法が粗雑となる。	・現段階では、生徒自身の予防意識の高まりと昼食時の默食の徹底が功を奏している。感染者は出ているが校内での感染は考えにくい状況である。 ・秋以降の感染状況がどう推移してくるのか不透明であるが、ワクチン接種を可能な範囲で実施してもらえるように啓蒙していきたい。	A	・生徒自身の不断の努力と教員の指導の徹底で、クラスターの発生や多数の感染者は出なかった。集団生活での予防対策の有効性が改めて実感できた。 ・生徒自身の予防意識が高まって、予防接種の実施率が上がった。また、発熱・接種副作用・感染への恐れに対する出席停止の日数も増加した。	A	
	昨年度A							
2 Chromebook等のICT機器を活用した個別最適な学び（個に応じた指導）の充実、海外研修をはじめとする学校行事の見直しなど、コロナ禍終息を見越した新たな学校を創造する。	・新学習指導要領の趣旨を踏まえた授業づくりや、新学習指導要領の趣旨を踏まえた学習評価を実行するにあたり、有効であると認められるものには、積極的にICTを活用し、前期課程を中心に主体的にChromebookを活用した学びを提供する。 ・ICTを活用した授業の校内実践収録を作成し、教員間で共有する。	GS推進室	A　各教科において主体的にGWSを活用した学びを生徒に提供できるという教師が50%以上いる。 B　各教科において主体的ではないがGWSを活用した学びを生徒に提供できるという教師が50%以上いる。 C　各教科において他の教師の支援がなければGWSを活用した学びができないという教師が50%以上いる。 校内実践収録について A　完成し教職員研修により共有できた。 B　完成し、配付できた。 C　ＡＢに満たない。	・現時点で、確実に授業にChromebookを活用している授業が増えている。詳しいアンケートについては年度末に行う予定である。 ・現時点では、実践収録の完成に向けて、実践報告を受け付けている最中である。今後年末の締め切りに向けてアナウンスしていく予定である。複数の報告を提出している教員もいる。	－	「各教科において主体的にGWSを活用した学びを生徒に提供できる。」と回答した職員が38%で、「各教科において主体的ではないがGWSを活用した学びを生徒に提供できる。」と回答した職員が38%で、「各教科において他の教師の支援がなければGWSを活用した学びができない。」と回答した職員が24%だった。校内実践収録は完成した。職員研修は、職員会議の後10分程度時間を確保して、５回以上研修をすることができた。	B	
3 大学入試改革の状況等を見据えつつ、前期課程と一体化した後期課程の教育課程を編成する	・現行教育課程の課題をふまえて、１学期中に後期課程の教育課程を完成させる。 ・進路指導課と連携し、大学入試動向（特に地歴公民・数学・情報）をふまえた対応案を作成する。 ・２～３か年を見通した学習計画を明らかにし、先行学習を実施する。	教務課	A　教育課程が完成しており、大学入試への対応案も作成できている。 B　教育課程が完成しており、大学入試対応のための情報収集に取り組んでいる。 C　教育課程が完成しているが、大学入試対応のための情報収集に取り組めていない。	・現時点で可能な作業は終了している。 ・共通テストに関連する情報収集に取り組んでいるが、各大学が新科目をどのように扱うか現段階ではアナウンスがなく、このことについての対応はできていない。	A	・新教育課程は３年生の先行学習で実践されており、履修は円滑に進められている。来年度の実施の準備もできている。 ・共通テストにおける教科「情報」出題への対応は、今後も情報収集を継続し、第６学年での対応案を来年度具体化する。	A	
	昨年度B							
4 高い目標を掲げてチャレンジする生徒を育成、支援する。 (1) 大学等と連携した研修等に参加させ、高い進路意識や志望を持たせるとともに、自己実現のための努力を促す。	学部研究・学問研究、進路講演会、オープンキャンパスへの参加などを通して、生徒の視野を拡げるとともに、進路意識の高揚を図り、高い進路目標を持たせる。また、その志望進路の実現に向けて、主体的に学習に取り組む生徒を育成する。	進路指導課	志望校調査・進路アンケートなどの結果やその推移をもとにして、重点目標の達成状況を総合的に評価する。 A　進路アンケート「主体的な学習ができているか」という項目に対する肯定的な回答が80%以上、学校評価アンケート質問項目4、10の肯定的な回答が90%以上 B　Aに満たず、昨年度の結果と等しい C　Bに満たない	・進路講演会については、緊急事態宣言の発出により、6月に予定していた6年生対象の講演会を7月上旬に延期して実施した。他学年については、感染状況も踏まえ、9月の下旬以降に実施可能な範囲でそれぞれ実施する予定である。 ・オープンキャンパスは、今年度もオンラインでの実施が多かったが、各学年とも進路情報の提供や面談等を通して進路意識の高揚を図っている。 ・生徒の志望状況については、難関大志望も多く、全体的に高い目標設定ができている。 ・達成状況の評価については、2学期実施予定の進路アンケートや学校評価アンケートの結果をもとにして評価する。	－	・進路アンケートの「主体的な学習ができているか」という質問項目に対する肯定的な回答は「1年:90%、2年:85%、3年:77%、4年:75%、5年:71%、6年:88%」という結果であり、多くの生徒が自己実現に向けて前向きに努力することができた。 ・学校評価アンケートの質問項目9（昨年度は10）については、91%となっており、昨年度（85%）と比較すると数値が上がっている。 ・生徒の志望状況についても、難関大や国公立大の医学科などレベルの高い大学を目指している生徒が多く、それぞれが高い進路目標を持つことができた。（東大・京大・医学科など最難関大の志望者の総数は、6年43名　5年40名　4年59名）	A	A
	昨年度B							
(2) 各種コンクール、セミナーへの参加を促し、他校生徒と積極的に交流させ、視野の拡大を図る。	・短期長期海外留学プログラムや英語ディベート大会など、グローバル教育推進室に係わる各種コンクール等について、教科との連携を図りながら、生徒の参加を促し、また参加生徒の活動を支援する。	グローバル教育推進室	参加生徒に対してアンケートを実施し、その結果を基に総合的に評価する。 A　アンケートの肯定的回答が80%以上 B　アンケートの肯定的回答が60%以上 C　Bに満たない。	・トビタテJAPAN留学内定者2名。（R3年度～R4年度にかけて実施可能。オーストリア、ウィーン/オーストラリア、ｼﾄﾞﾆｰ） ・英語ディベート参加生徒25人。（1年3人、2年3人、4年4人、5年11人）　前期生、第11回全国中学生英語ディベート大会参加。 ・神戸女学院大学絵本翻訳コンテスト2作品応募。県内各種スピーチコンテスト参加。	B	・トビタテJAPAN留学内定者の2名はR4年度での実施を目指して、計画を継続している。現地の状況や留学の準備についてヒアリングを行う。 ・英語ディベート全国大会では32位で、昨年度より順位を3つ上げて、健闘した。 ・翻訳コンテストについては2作品、4名が参加し、英語翻訳の難しさや魅力を体験した。	A	
	昨年度韓国慶尚南道交流事業に2名、英語ディベート全国							
(3) 英検準1級レベルの、国際的に通用する高い英語力を身に付けさせる。	多様な情報を読み取り、内容をまとめて相手に伝える力や、自分の考えを、話したり書いたりする力を身に付けさせることを目標に、「読む」「聞く」「書く」「話す」の4技能・5領域を伸ばすための授業を展開し、ディスカッションやディベートへと活動を広げていきたい。新型コロナ感染防止のため、マスクの着用と換気をしっかり行う。	英語科	英語の授業でディスカッションやディベートに関する活動を6年生以外の各学年で行う。新型コロナ感染予防の観点から、マスクの着用、換気等の対策をしたうえで、その活動の時間を確保する。 A　各学年とも3時間を超えた。 B　各学年とも2時間から3時間程度であった。 C　Bに満たない。	・マスク着用の上、換気等の対策を取ったうえで、各学年に応じた英語で話す機会を持つことができた。 ・英語での問答やミニディベート的な取り組み等、普段の授業の中でレッスンに応じて行った。	A	・新型コロナ感染予防対策として、マスク着用の上、換気等の対策を取ったうえで、各学年に応じた英語で話す機会を持つことができた。 ・英語での問答やミニディベート的な取り組み、サマリーの発表など、普段の授業の中でレッスンに応じて行った。	A	
	昨年度A							
	英検の準会場として年3回、一次試験の受験がしやすい環境を作る。低い級から順に受験の雰囲気づくりをし、準1級以上の者も本会場で抵抗なくチャレンジできるようにサポートする。 英検準1級レベルはCEFR　B1～B2のあたりに相当するので、英検だけでなく、GTECも年1回、4、5年生の校内受験の機会を持つ。	英語科	校内受験の機会を保障し、受験した生徒数に対する到達率を指標とする。 A　30%の生徒が目標レベル（B1）に達している。 B　25%の生徒が目標レベル（B1）に達している。 C　Bに満たない。	・コロナ対策をしながら、今年度は英検も準会場となり受験しやすい環境を作ることができた。（第1、2回） ・GTECについては、3年Basic、4、5年Advancedのコースを原則全員学校受験することができた。結果は年度末の報告となる。	－	・新型コロナ感染予防対策をしながら、今年度は年間3回の英検（一次試験）を準会場として実施することができた。生徒にとって受験しやすい環境を作ることができた。 ・GTECについては、3年Basic、4、5年Advancedのコースを原則全員学校受験することができた。結果は良好であった。3年生はほぼ全員がA1以上、4、5年生はほぼ全員がA2以上。B1に達しているのはあわせて49.3%であった。３年生を含めても30%を超えた。	A	
5 各教科での学習と総合的な学習（探究）の時間とを連関させ、探究的な学びを深める授業改善に取り組む。 (1) 前期課程では、身の回りの様々な課題に気付くことができるよう地域社会や自然現象についての情報収集を促し、課題解決に向けた学習等に取り組ませる。後期課程では、自らの進路選択にもつながる探究活動とする。	昨年度までの取組で、各学年で行っている総合的な学習（探究）の時間のおおまかな枠組みができ、6年間の縦のつながりを意識して実施し始めたところである。本年度は、縦のつながりはもちろんだが、個々の取組の内容が課・室のねらいにあったもので、より内容の濃い学習内容になるようにすることを目指している。具体的には取組の中心となる分掌の係と取組のねらいや実施時期や方法などの情報を集め、年間を通した指導計画の調整を行う。	総合研究開発室	学校評価アンケートの結果を基に総合的に判断する。 A　肯定回答が80パーセント以上 B　肯定回答が60パーセント以上 C　肯定回答が60パーセント未満	・定期的に会議を持ち、情報交換や活動方法などについて検討をしている。 ・ICTを用いた活動について、記録を残している。	－	・学校評価アンケートの生徒の回答において、肯定回答が83パーセントであった。しかし、保護者65パーセントであることや、生徒も学年が上がるほど、肯定回答の割合が下がることなどから、さらに検討していく必要があると考えられる。 ・6年一貫のカリキュラムのさらなる充実や、活動を発信していくことが今後の課題であると考えられる。	B	
	昨年度B							
(2) コミュニケーションを深め、互いの違いを認め合う集団づくりを行う。	・「品格教育」や「PBIS」「ピア・サポート」等の活動を教科や学年団と協力して進める。 ・「相談室便り」を活用した心を育む情報提供を行う。また、特別支援・人権に配慮した環境づくりに努める。	教育相談室	A　hyper-QUの結果について、学校生活満足群が70%、ASSESSの結果について対人的適応と学習適応が共に高いエリアにいる生徒が70%を越える。 B　同項目において、いずれかが60%を越える。 C　同項目において、いずれも60%を下回る。	・Hyper-QUの結果 1年66%　2年65%　3年70%　前期全体67% ・Assessの結果 4年61%　5年65%　6年73%　後期全体66% ・後期課程では学習内容も難しくなり、家庭や学校でのプレッシャーも高まるため、生活満足度がやや下がる傾向にある。また、LHR・学活でクラスの時間もなかなか取れず、PBIS・ピアサポートの活動が進められていない。時間や内容などの工夫が必要である。	B	・前期課程第2回　Hyper-QUの結果 1年66%　2年71%　3年68%　前期全体68% ・後期課程第2回　4年Hyper-QU・5、6年Assessの結果 4年65%　5年74%　6年73%　後期全体71% ・前期課程・後期課程それぞれで、学校生活満足群に含まれる生徒が増加した学年があった。後期課程では評価基準Aを達成することができた。増加につながった取り組みは共有し、さらに増加していくよう支援を進めたい。また、引き続き予防的措置と個別支援体制の教化を進めていきたい。特に予防的措置の取り組みについては改善が必要である。	B	
	昨年度B							
	学校行事に積極的・主体的に参加し、仲間と協力できるように各行事ごとに指導する。 対象行事 1年…球技大会・オリキャン・白鷺祭 2年…球技大会・長距離ウォーク・白鷺祭 3年…球技大会・白鷺祭 4年…球技大会・白鷺祭 5年…球技大会・長距離ウォーク・白鷺祭 6年…球技大会・白鷺祭	生徒課	行事後にアンケートを実施し、それをもとに総合的に評価する。 A:「よくできている」が全校の75%以上 B:上記が60%以上75%未満 C:Bに満たない。 （評価は、全行事の平均で行う。）	・1学期は、球技大会が中止となり全学年での集計ができていないが、1年オリキャン・2年長距離・5年超距離の集計では、「よくできている」が80%近くある。 ・コロナ禍であっても白鷺祭ができたのは生徒には大きな経験であったと思われる。 ・今後2学期の行事についてアンケート、集計を進めていく。	A	・集計できた行事は、1年オリキャン、2年長距離、5年長距離、白鷺祭（全学年）、冬季球技大会（1～5年）であった。 ・冬季球技大会は、午前は前期、午後は後期で行い、5学年が同時に集まることはなかった。 ・すべての行事の「よくできている」の平均は79%であり、例年に比べ制約がある中であっても、生徒は、主体的、積極的に協力して参加できたと思われる。	A	
	昨年度A（白鷺祭のみアンケート実施）							
	・グローバルコーナーにおいて参加型クイズ(月替わり計10回)やグローバル社会に関連した情報を発信する。 ・はばたけ大安寺Dayや海外研修事前学習などのグローバル行事において、生徒が積極的に関わり、生徒の学びや意識・行動が高まる活動を取り入れる。 ・行事終了後、生徒が自己目標に対する達成度を自己評価し、それに基づいて評価する。	グローバル教育推進室	生徒達成度 A　平均80%以上 B　平均60%以上 C　Bに満たない。	・はばたけ大安寺Dayのアンケート（1年～4年）では満足度で94%が肯定的回答であった。コロナ対策の関係から一部の取り組みが文化祭で発表された。行事後の担当学年である4年生は達成度について評価し、平均値で82.3%となった。 ・グローバルコーナーでのグローバルクイズ、時事問題の紹介は生徒の参加を促す工夫をし、グローバルマインドの育成を図り、今後も続けていく必要がある。		・海外研修事前学習での「2年生留学生との交流会」では2日間で延べ21人の県内在住の留学生と2年生が英語を通じて文化交流を行った。日本玩具や雅楽など多岐にわたる内容で行った。SE(スピーキングイングリッシュ)の授業で準備、練習を続けた成果を披露した。9割以上の生徒が高い満足感を得ていた。 ・5年生はグローバル講演会を3学期に実施する。 ・グローバル通信ではSDGsの各ゴールを1～4まで紹介し、年度末までに9までを紹介する。残りは来年度継続して紹介する。 ・グローバルクイズでは延べ11名が参加している。	A	
	昨年度　83.5%							
(3) 振り返りの機会を設け、自身の取組を客観的に見つめる「俯瞰する力」を育成する。	電車マナー、交通マナー等の指導を通して、自分自身の態度について見つめ直させ、他者に迷惑のかからない行動が取れるようにする。	生徒課	1月平均の苦情電話件数によって評価する。 A：1件未満 B：1件～1．5件未満 C:1．5件以上 昨年度は年間で14件の苦情電話があった。	・現在7件の苦情電話があり、交通が5件、電車マナーが2件である。共通するのは、生徒同士が話等に夢中になり、周りの方の通行の邪魔をしている状況が多いことである。 ・HRや集会等で注意を促していく。	B	・1月末の段階で11件の苦情電話があり、交通7件、電車マナー4件である。例年より特に多いわけではないが、少しでも少なくなるように注意喚起を継続していく。 ・注意を受けた後の態度についても指導するようにする。	B	
	昨年度B							
6 業務の進め方を組織的に、また、一人一人が見直し、部活動を含む1か月当たりの時間外業務時間を80時間以内とする。（2とも関連）	ミライムの入力を徹底し、各自の業務時間を意識する。 定時退校日等の設定 定時退校日　月1回 8時には退校日　月1回	管理職主幹教諭	A　月80時間以上の人数が平均5名以内となる。 B　月80時間以上の人数が10名以内となる。 C　Bに満たない。	・4月：23人、5月：5人、6月：11人、7月：4人、8月1人、平均：8.8人 ・年度初めは多くなっているが、以降は学校が休業になった時期のある昨年度並みとなっており、定時退校日の管理職による呼びかけなど一定の効果が表れている。	B	・9月：5人、10月：11人、11月：7人、12月：5人、 1月：9人、平均：7.4人、年平均：8.1人 ・1月は中学入試のため増加が予想されたが、部活動の自粛等のためかやや抑えられたと思われる。 ・一昨年度より低下し、昨年度とほぼ変わらない結果となっており、会議のペーパーレス化など業務効率も上昇しているものと思われる。	B	
	昨年度月80時間以上の人数　8.09人／月　評価B 元年度は15.07人／月							